

スペイン語の否定語と否定極性項目の インターフェイス

田 林 洋 一

1. 序

本稿では、スペイン語の否定語 (Palabras Negativas, 以下 PN) と否定極性項目 (Términos de Polaridad Negativa, 以下 TPN) の特徴を挙げ、その機能的差異と統語的・意味的な振る舞いを通して、PN と TPN の区分けを行うことを目的とする。

2. PN について

本稿では、no, nada, nadie, nunca, jamás, tampoco, ni, ninguno/a の 8 つを PN とする。PN に共通する点は、①動詞の前に置くと否定環境を作ること、②原則として動詞の前に複数の PN を置くことが出来ないこと¹、である。従って、基本的にこれらに違反した場合は (1b) と (1c) が示すように非文となる。

- (1) a. Juan nunca viene a la reunión.
 b. *Juan viene nunca a la reunión.
 c. *Juan nunca no viene a la reunión.

日本語の「誰も」や「何も」は必ず否定辞「～ない」を伴う必要があり、内在的に否定要素を持っていないため、TPN である。一方、スペイン語の nada や nadie は動詞の前に置かれることで否定環境を作ることが出来るので、否定要素を持っている。従って、日本語の PN は「ない」の一つだけであり、「誰も」や「何も」は、それぞれスペイン語の nadie と nada の TPN としての機能にのみ対応していると思われる。

PN が否定の呼応の結果 TPN として働く例と、単に否定環境を好む TPN は以下のように区別される。

- (2) a. No vino nadie.
 b. Nadie vino.
 c. *Nadie no vino.
- (3) a. No tolera la menor intromisión en su trabajo.
 b. *La menor intromisión tolera en su trabajo.
 c. (?) La menor intromisión no tolera en su trabajo.

1 稀に (i) のように複数の PN が動詞の前に置かれても容認される。

(i) Nunca y nadie hace nada.

(2a) は [no+V+PN] の語順であり、概念構造内では PN の nadie は対応する肯定極性項目 ALGUIEN として出現している。即ち, nadie は (2a) では動詞の後に置かれているために否定環境を好む TPN として働くだけで、基本的に PN である (nada, nadie, ninguno, nunca, jamás, tampoco, ni も同様)。(3a) は否定環境の中に la menor intromisión という TPN が出現しているが、PN とは違い、la menor intromisión が動詞に前置するだけでは否定環境を作ることが出来ず、結果として (3b) のように非文となる (なお、La menor intromisión la tolera en su trabajo. のように、目的語のマーカー la を入れれば字義通りの解釈が可能ではある)。更に、PN と違い、(3c) のように PN と同時に動詞に前置したとしても完全に非文にはならない。

PN と TPN の違いは以上の通りである。要約するならば、PN は否定の呼応として TPN として振る舞うことはあるが、それはあくまでも PN が持つ一機能に過ぎない。一方、TPN は (siquiera を除いて) それ単独では否定環境を作りえず、(3a) のように PN が現れるか、(4a) のように否定極性誘因子が出現して否定環境になる場合を除いて、TPN が出現することはない。

(4) a. A Juan le molesta el menor ruido.

b. A Juan le agrada el menor ruido.

(4a) は動詞 molestar が否定極性誘因子として出現しているために、TPN の el menor ruido が正しく出現する。一方、(4b) は動詞 agradar が出現しているものの、el menor ruido は TPN として量的に働くことはなく、単に「ファンは最も小さな音が気に入っている」という否定要素が入らない表現となる。PN と TPN の違いは、前者が義務的に否定環境を要求するのに対し、後者は (4b) が示すように、単なる叙述として機能することである²。

(5) *A Juan le agrada ningún ruido.

(5) が非文の理由は、ningún が、それ以外の PN ないしは否定要素が動詞の前に置かれることなく動詞に後置されていること (これは PN の要件に違反している)、動詞 agradar が否定極性誘因子ではないため、TPN が現れてはならないということである (これは否定環境を好むという TPN の特性に反する)。TPN が否定環境を伴わずに現れる例もあるが、その場合は (4b) のように量的な解釈はなく単なる叙述であるか、(6) のように非文となる。

(6) *Esta noche he podido pegar ojo.

Sánchez López (1999: 2564 一部改)

2 虚辞の否定 (Negación Expletiva) についてはこの原則が崩れることがある。

(i) Cuántas horas no habré pasado en la hamaca contemplado el mar, claro o tempestuoso, verde o azul, rojo en el crepúsculo, plateado a la luz de la luna y lleno de misterio bajo el cielo cuajado de estrellas. [Pío Baroja, 1941: 9 Las Inquietudes de Shanti Andía. Espasa Calpe.]

(i) に出現する否定語 no は動詞 habré pasado の前に置かれているにもかかわらず、肯定文「ハンモックの中で海を眺めながら長時間を過ごした」と解釈される。

3. TPN について

TPN とは、(7a) が示すように日本語で「決して」、「全く」などのように PN「ない」を伴って現れる言語表現か、「やむを得ない」のように独立した慣用句で現れる言語表現を指す。(7b) はスペイン語、(7c) は英語の例である³。

- (7) a. フアンは彼のためには指一本動かしません。
- b. Juan no mueve un dedo por él.
- c. John does not lift any finger for him.

TPN は否定文だけでなく、否定極性誘因子 (Activadores Negativos) として働く疑問文・比較構文・si 節などにも出現するため、厳密には「否定環境での出現を好む言語表現」と定義する必要がある。

TPN は、①段階的な極限を表す TPN、②慣用句としての TPN、③不定詞句の TPN、④名詞の後に置かれた alguno, が挙げられる。共通点は「段階的な極限 (Extremo Escalar)」という性質を持つことである。更に、⑤述語の継続相と完了相に関連する語彙単位、つまり前置詞 hasta や副詞 todavía と ya、⑥限定辞が欠落した「裸の」名詞句、⑦後置された alguno, も TPN である。

①の段階的な極限には、統語的・形態的な側面以外に、談話的・社会的・文化的な側面で「極限」が表されれば、TPN となる可能性がある。

- (8) No tiene (ni) un duro.

(8) は PN の no が出現することにより否定環境が与えられているため、TPN として un duro が出現し、「一円もない」という量化的な解釈が可能となる。最上級が TPN として機能するかどうかは最上級が量化的か絶対的かで決定される。量化的な最上級の場合は TPN として振る舞うことが出来るが、絶対的な最上級の場合はその限りではない。従って、(4a) は el menor ruido が量化的か絶対的かによって解釈が異なるために曖昧となる。

- (9) a. A Juan le molesta el menor ruido, aunque curiosamente no otros ruidos más fuertes.

3 TPN の振る舞いは言語の種類に左右されない、ある程度普遍的な現象のように思われる。しかし、以下のように個別言語間でも語彙的に多少の差異がある。

- (i) a. 私は彼がとても好きです。
b. ?*私は彼がとても好きではありません。
- (ii) a. *I like him much.
b. I don't like him much.
- (iii) a. Te quiero mucho.
b. No te quiero mucho.
- (iv) a. Tykkään sinusta paljon.
b. En tykkä sinusta paljon.

(i) は日本語、(ii) は英語、(iii) はスペイン語、(iv) はフィンランド語の例であるが、意味的にはほぼ等価な「とても」、「much」、「mucho」、「paljon」でも日本語では肯定極性項目、英語では TPN として働くが、スペイン語及びフィンランド語では極性項目ではない。一方、語彙ではなく疑問文、仮定節などの言語環境では、個別言語ごとの揺れはあまり見られない。このことから、TPN は統語的要素よりも意味的要素に大きく依存していると考えられる。

b. A Juan le molesta el menor ruido, y por consiguiente cualquier ruido que sea mayor.

Sánchez López (1999: 2592 一部改)

(9a) はやや有標的な解釈であるが、「ファンは最も小さな音が気になるが、奇妙なことにより大きな騒音は気にならない」という絶対的な解釈を持つ。一方、(9b) は無標の解釈であり、「ファンは小さな音さえ気にする、従って、より大きな音も気にする」という量的もしくは段階的な解釈を持つ。(9b) が示す量的な解釈は、論理的含意によって発生するものではなく、一般的知識に根ざした語用論的含意によるものである。即ち、ある音 x_1 がファンにとって気になるものである時、それより大きな音 $x_2, x_3, x_4 \dots x_N$ もまた、ファンにとって気になるものであるという推論が可能である。つまり、ある階層ないしは段階における極限の状態が真である場合、極限でない状態もまた(論理的ではなく語用論的に)真であるということが出来る。従って、(9b) の *el menor ruido* は量的な意味を持ち、(10) のように量的な表現である *cualquier ruido* と置換することが可能となる。

(10) A Juan le molesta cualquier ruido. (=A Juan le molesta el menor ruido.)

(11) a. Onassis no podría pagar este lujo.

a'. Ni siquiera Onassis podría pagar este lujo.

b. Federico no confía en su propio padre.

b'. Federico no confía ni siquiera en su propio padre.

c. Cuando estudio no puedo oír el zumbido de una mosca.

c'. Cuando estudio no puedo oír ni siquiera el zumbido de una mosca.

Bosque (1980: 119 一部追加及び改)

(11a) は、文脈なしでは最上級の意味特性を持つ語彙はない。しかし、(11a') のように *ni siquiera* を伴うと、Onassis は大金持ちであるという含意が成立する。この意味するところは、統語的(ないしは *mejor/peor* などの場合は形態的)な量的最上級や語彙特性から生じる量的最上級の他に、談話文脈からの量的最上級も存在するということである。つまり、(11a) は「オナシスは大金持ちである」という背景知識が前提となっている場合に量的最上級として Onassis が機能するだけであり、単に (11a) を文脈なしで提示されても、Onassis が量的最上級かどうかを見分ける術はない。その背景知識を明示的に表すには、*ni siquiera* を伴って出現させるか、*Onassis es un famoso millonario.* のような意味を持つ文(要は Onassis が大金持ちであるという文)を先行させて文脈を付加するか前提とする必要がある。同様に、(11b) 及び (11c) は、それぞれ (11b') 及び (11c') の *ni siquiera* の意味的補助がなくとも、それぞれ *propio padre* 及び *el zumbido de una mosca* が量的最上級として機能しているように見える。しかし、両者とも社会的・文化的な側面を含む語用論的な背景ないしは *ni siquiera* のような統語的・意味的補助が必要である。

総括すると、(11a) は談話的、(11b) は社会的ないしは文化的、(11c) は社会的ないしは地域的な原因で、それぞれ極限を表す量的な最上級となり、TPN として出現する。つまり、量的最上級と判断され TPN となるには、統語的・形態的側面、語彙的側面及び語用論的側面の三つの条件のうち、一つ以上を満たす必要があるということになる。

量的最上級が TPN として機能するのは、その極限性ではなく、量的な性質を持つからである。

即ち「ある極限以外の全て」が最上級の否定であり、量化的な性質を持たない絶対的最上級では「ある極限以外の全て」が量化的ではなく、一義的になる。

- (12) a. No tolera la menor intromisión (siquiera) en su trabajo.
b. No tolera la intromisión relacional (¿siquiera) en su trabajo.
c. No tolera la intromisión presidencial (?siquiera) en su trabajo.

(12a) は TPN として量化的最上級が現れているため、否定の強調の意を表す *siquiera* が出現しても非文にはならない。一方、関係形容詞である *relacional* が出現した場合、量化的な解釈は得られないため、(12b) のように *siquiera* が出現するとやや有標的な表現となる。しかし、同じ関係形容詞である *presidencial* が出現すると、有標性は低くなる。これは、形容詞の性質ではなく、形容詞 *presidencial* が持つ意味的な「極限性」にある。つまり、関係形容詞の機能自体に極限性を表す要素はないが、形容詞 *presidencial* には内在的に「学長のでさえ」という極限の意味が語用論的に存在する。

さて、スペイン語の否定極性慣用句 (Modismos de Polaridad Negativa) は多岐に亘るが、それぞれが何らかの形で量化的ないしは極限の意味を持つ⁴。否定極性慣用句は Sánchez López (1999: 2594) でかなりの程度リストアップされているが、概ね共通して極限の意味を持っていることに注目したい。例えば、*no mover un dedo/pestaña* (指一本・眉一つ動かさない) という慣用句には、指や眉すらも動かさないのであれば、それ以外の大部分は当然動かさないという上限の規定及び下方の含意が生じる。指及び眉を動かすという行為は、行動の中でも最も小さなものの一つであり、極限を表す。よって、それ以外の大部分は量化的な意味合いを持つ。

否定極性慣用句は単に統語的ないしは狭義の意味的な視点からでは分析できない、語用論的な背景知識を考慮に入れる必要がある。仮に否定慣用句 *mover un dedo* を語彙として語彙部門 (Léxico) に登録したとしても、そこから全ての文脈において *mover un dedo* は含意する存在量子 *cualquiera cosa/ninguna cosa* と置換可能というわけではない。

- (13) a. Juan no mueve un dedo para María, sino hace todo lo que pueda.
b. #Juan no hace ninguna cosa para María, sino hace todo lo que pueda.

(13a) は「ファンはマリアのために指一本動かさないわけではなく、(むしろ) 出来ること全てをしてあげる」というメタ否定的な解釈が可能であるが、(13b) は「ファンはマリアのために何もしてあげないのではなく、(むしろ) 出来ること全てをしてあげる」というメタ言語的な解釈は容認しづらい。これは、(13b) の *ninguna cosa* と *todo* が相補分布的な関係にあること、指一本動かさな

4 否定極性慣用句の(背景知識からの)語用論的な段階的最上級と、統語的な量化的最上級は厳密に区別する必要がある。前者はあくまで背景知識に根ざされたものであり、如何なる統語的影響も受けない。例えば、否定極性慣用句 *mover un dedo* は、あくまで「指一本も動かさないなら、他も動かさないだろう(即ち全く動かないだろう)」という語用論的推論に基づいた段階的最上級(*mover un dedo* に関して言えば最下位)を含意するだけである。従って、仮に「指一本」という表現が段階的最上級を含意しない社会的または文化的背景が存在する環境ならば、*mover un dedo* は段階的最上級を表さず、結果として否定極性慣用句にもならない。一方、後者は統語的に最上級を明示しているために(極限から量化的な解釈に至るには語用論的な側面が関与するものの)語用論的な含意による「極限」はない。

いということは「語用論的に」何もしないことを含意するが、この含意は否定によって取り消し可能であることなどが原因と思われる。

極限の意味によって否定極性慣用句を説明する原理は、最小量だけでなく最大量の否定でも発揮される。例えば否定極性慣用句 *no ser santo de la devoción de alguien* や *no ser gran cosa, no ser cosa del otro jueves* 等は、上限を否定することによって、それより上位のものは存在しないという含意を導き出すことが出来る。つまり、上限を否定することはそれより上位のものは存在せず、下位のものを含意し、下限を否定することはそれより下位のものも存在せず、上位の事象を含意するという定式化が成り立つ。両者とも、ある段階における極限から他方の極限を含意することで、量化的な意味を（語用論的ないしは意味的に）持ち、結果として TPN として働きやすくなる。

最小量ないしは極限を表す表現が常に TPN になるというわけではない。

(14) *No tengo una peseta.*

(15) *No tengo una peseta, pero tengo un real.*

(16) a. *No tengo un duro.*

b. *No tengo un real.*

c. *No tengo un céntimo.*

(17) *?No tengo un duro, pero tengo una peseta.*

(14) は実際の金額にすると (16a) よりも安い (1 ドゥーロ=5 ペセタ)。しかし、(14) は単に 1 ペセタを持っていないと叙述しているだけで、それより高額のお金を持っているかどうかは情報として与えられていない。また、否定極性慣用句として働くこともないので、「全くお金を持っていない」という意味も持ちえないため、(15) は容認可能な文となる。一方、(16) は金額の多寡にかかわらず、全て否定極性慣用句として働いた結果「お金を全く持っていない」という情報が上限の規定の含意から導き出される。従って、(17) は「お金を全く持っていないが、1 ペセタは持っている」と解釈されることになり、有標的または不適格な表現となる。

要約すると、TPN として働くには、①量化的な性質を持つこと、②命題的な性質を持つこと、③不特定な性質を持つこと、のうちいずれかを満たすことが条件となる。このうち、不特定な性質を持つことは即ち量化的な性質を持つと語用論的に推論しうるため、畢竟、①と②に還元することが出来る。

名詞に後置された *alguno* は TPN として働き、「裸の名詞句」と同じく不特定の意味を持つ。不定語 *alguno* は、①否定の作用域内に出現し、②名詞の後ろに置かれ、③義務的に単数で出現した時に TPN として機能する。

(18) a. *No hay libro alguno que me guste.*

b. *No vino turista alguno.*

c. *No me comí fresa alguna.*

Bosque (1980: 63)

名詞に後置された *alguno* と「裸の名詞句」が統語的に異なる点は、前者が明示的に不特定の意味を表し、命題的な内容を伴う必要がないのに対し、後者は関係節や前置詞句などを伴って命題的な内容を明示しなければならないということである。

- (19) a. No hay libro que me guste.
 b. *No vino turista.
 c. *No me comí fresa.

(19) は (18) の後置された *alguno* と平行関係にある。このうち、(19a) は関係節 *que me guste* が裸の名詞句 *libro* に後続するので適格だが、(19b) の *turista*、(19c) の *fresa* は命題的な内容を表さないため非文となる。なお、②の条件は TPN としての「名詞に後置された *alguno*」の前提条件であり、以下の文に出現する名詞に前置する *alguno* とは意味的に異なる。

- (20) El presidente no respondió alguna pregunta. Sánchez López (1999: 2581)

裸の名詞句単体が TPN として容認されなくとも、[裸の名詞句+*alguno*] の場合は「任意性」を持ち、TPN として容認する。これは、後置された *alguno* が英語の *any* とほぼ等価の働きをすることを意味する。即ち、裸の名詞句単体では命題的な意味内容を持つことが必須であったが、後置された *alguno* は命題的な意味を付加することはないが、量化的な内容をより強めることによって、強い TPN として振る舞う機能を持つと言うことが出来る。従って、意味的な観点から裸の名詞句と同様(ないしはそれ以上)に「任意性」ないしは「不特定性」を持つことが、後置された *alguno* が出現する意味的条件だと思われる。しかし、*en modo alguno* 以外の「名詞に後置した *alguno*」は、単に TPN としての機能しか持たず、PN として単独で否定環境を作ることは出来ない。

更に、後置された *alguno* はしばしば PN である *ninguno* と対比して分析される。

- (21) a. De ningún modo.
 b. *De modo alguno.
 (22) a. *En ningún modo.
 b. En modo alguno.

Bosque (1980: 64)

ここで語彙化を強調するのは、PN である *ningún* が出現する (21a) 及び TPN である *modo alguno* (裸の名詞句+*alguno*) が出現する (22b) は容認されるのに対し、それと意味的等価でありうる (21b) 及び (22a) は容認されないからである。従って、本節では *en modo alguno* (及び *de ningún modo*) を一つの語彙化された表現とみなし、PN として振る舞うと言及するだけにとどめる。

以上の議論を要約すると、裸の名詞句及び後置された *alguno* も TPN となるには、①量化的な意味、②命題的な意味、の両方(どちらかの意味が強い場合には片方)が必要であるということになる。

4. 総括

本稿では、スペイン語の PN と TPN の差異を分析し、その特徴を見た。畢竟、PN は動詞の前に置かれると否定極性を命題に与えること、TPN は否定環境を好む表現であること、がそれぞれ持つ特徴であり、PN の中には統語的環境の違いにおいて TPN となる場合と PN となる場合とがある。また、TPN は基本的に極限の意味を持つ表現であり、極限の向きは問わない。本稿で重視したのは PN として振る舞う語が TPN の機能も同時に持つ場合を厳密に区別することと、TPN は普遍的に極限を表し量化的な意味を持つことである。今後、PN の対照研究などを含めた普遍的な否定語の分

析が期待される。

参考文献

Bosque, I (1980) *Sobre la negación*. Catedra.

Sánchez López, C (1999) “La negación.” en Bosque, I y Demonte, V. (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española*. Vol. 2. 2561-2634. ESPASA.

(たばやし よういち 総合教育センター)